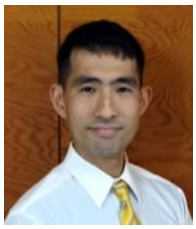
2026年1月号

合同 No.５０１

「ルールの奥にあるもの」



屋代教会牧師
石坂　和久

「もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう」マタイによる福音書１２章７節。

児童館（学童）でアルバイトをするようになって、気付けば４年目になりました。毎日子どもたちと過ごす中で、楽しいこともたくさんありますが、考えさせられる場面にもよく出会います。特に気になるのが、ルールの扱われ方です。

児童館には、お互いが気持ちよく過ごすためのルールがいくつかあります。建物内では走らないように、挨拶をしよう、勉強中は静かにすることなど、どれも互いに快適に過ごすために設けられたものです。けれど、実際にはそのルールがうまく機能しないことが多いのです。

子どもたちは、そのルールを自分を省みるためではなく、他人を裁くために使ってしまうのです。「あの子がこのルールを破った」、「あの子はあのルールを守っていない」と、声高に叫ぶ姿を何度も見てきました。しかも、そうやって他人を責める子に限って、自分自身はそのルールを守っていないことが多いのです。思わず「それ、君もじゃない？」と突っ込みたくなることもあります。

その結果、本来はみんなで気持ちよく過ごすために作られたはずのルールによって、かえってギスギスした空気が生み出されてしまう。ため息が出ます。なぜこうなるのか。やさしさがないな、愛がないなと感じるのです。

この様子を見ながら、ふと聖書に登場するファリサイ派や律法学者の姿が思い浮かびました。彼らは律法を学び、守ることに熱心な人々です。そもそも律法には、神の民としての生き方が記されています。神を愛し、隣人を愛すること。互いに愛し合うこと。それが律法の根底にある神の思いです。

しかし、ファリサイ派や律法学者たちは、その神の思いを見失ってしまいました。彼らは律法を守れる自分に誇りを持ち、自分たちは正しい者だと考えるようになりました。そして、律法を守れない人々を罪人とみなし、裁き、遠ざけるようになったのです。互いに愛し合うために与えられた律法が、いつの間にか人を裁き、拒むための道具になってしまった。神のため息が聞こえてくるような気がします。

こうしたことは、わたしたちにとっても他人事ではありません。ルールを守っているように見えても、その本来の目的を見失ってしまうことは、日常の中でもよくあることです。例えば、ルールの抜け穴を探して、「違反はしていません」と言う。でも実際には、そのルールが目指していたものとは真逆の行動をしている、そんな場面に出くわすと、ルールそのものよりも、それを使う人間が問われているように感じます。どんなに規則やルールを整えても、そこに愛がなければ意味がない。そう思わされます。

では、どうすれば人の心は変わるのでしょうか。それは、一つの出会いによってです。わたしのために命を捨ててくださった方がいる。その事実に出会うとき、わたしたちは変えられます。イエス・キリストの十字架―あの愛に触れるとき、わたしたちの心は静かに、でも確かに揺さぶられるのです。

その愛は、条件付きではありません。ルールを守ったから、良い子だったから、という理由ではなく、ただ「あなたがあなたであるから」注がれる愛です。失敗しても、間違っても、見捨てられない。そんな無償の愛に出会ったとき、人は初めて、自分の弱さを認めることができ、他人の弱さにも寄り添えるようになるのではないでしょうか。

そして、この愛に触れた人のまなざしは変わるのです。ルールを盾にして誰かを責めるのではなく、ルールの奥にある「思いやり」や「守りたい気持ち」に目を向けるようになる。ここに希望があります。愛によって人が変えられていく。そうして一人ひとりが変えられていくとき、この世界も少しずつ、でも確かに変わっていくのだと思います。